

說苑

元中東宮考

長慶天皇に關聯せる問題の一

芝 葛 盛

一

史 苑

久しく史學上の問題であつた長慶天皇即位非即位の論は、最近その解決を見て、天皇の御在位は確實と認定せられ、第九十八代の天皇として、御歷代に列せらるゝことゝなつた。併しながら之に關聯して、決定せられねばならぬ事で、尙未解決の問題として遺されたものが少くない。天皇崩御の年月の如き、天皇の御陵の如き、天皇の御生母嘉喜門院の御家系の如きも、その二三の例である。

天皇崩御の年代は、大乘院日記目録の記載に據て、應永元年八月一日と暫定せられて居るが、是については猶研究すべき餘地が甚だ多い。天皇の崩御は寧ろこれよりも以前のことであらうと想定すべき材料がないではないが、

元中東宮考（芝 葛 盛）

五七

適確に之を立證すべき史料を得ないのを遺憾とする。

天皇の御陵については、その傳説地と云はるゝものが、殆んど全國に亘つて居ると云つてもよい位で、その數も三十餘箇所に及んでゐる。併し今日迄の管見によれば、是等の中には信すべき證左を備へたものが一つもない。元來天皇の御終焉地が明瞭でないから、この問題の解決は容易でない。

天皇の御生母が嘉喜門院であることは明白であるが、その御姓名御出自については不明である。古くは近衛經忠の女勝子といふ説があつたけれども、信すべき典據を見出しかねる。又故八代國治氏は二條師基の猶子にして、師基の室家清水谷氏の出ならんと云はれたるも、これ亦遽に信じ難きことは、先年同氏と議論を闘はしたることもあり、今日尙未決の問題たるを免れない。

かくの如く長慶天皇御在位のことは確認せられたるも、尙これに關聯して、研究解決を計らねばならぬ幾多の問題が遺されて居るのである。是等は篤學の士の研究發表のあるのを切望して止まぬ。予も亦驥尾に付したいと思つてゐる。

今次に述べんとする元中年間の東宮についての考察も、稍間接ではあるが、矢張これに關聯した一の問題としての一小篇である。

二

後村上天皇の皇子寛成親王は正平二十三年父天皇崩御の後を承けて位に即き給ふた。即ち是が長慶天皇で、皇弟

熙成親王を立て、皇太子とせられた。弘和三年、長慶天皇は位を退かれ、皇太子熙成親王が御兄天皇の讓を受けて即位せられ、後龜山天皇と申し奉つた。後龜山天皇はまた皇弟を以て皇太子とせられた如くである。一條經嗣の日記荒曆の應永元年二月六日の條に、

此日南主奉號大覺寺殿於三天龍寺長老坊與准后有二謁見事一爲三初度二云々、彼御舍弟於三南方一同御對面爲三東宮一

右文中南主大覺寺殿といふは、元中九年應永元年の前々年吉野より京都に還幸あり、嵯峨の大覺寺の佛母心流を皇居として、住み給ふた後龜山天皇のことで、准后とあるは足利義滿のことで、此日、天皇天龍寺の長老坊に於て初めて足利義滿に謁を賜ふた事を記したるものであるが、天皇の御舍弟も亦同じく御對面ありしことを記し、御舍弟に註して於三南方一爲三東宮一とあるのを見れば元中懋和以前後龜山天皇は皇弟を以て皇太子とせられ、京都還幸の際も皇太子を具して大覺寺に入り給ひしことを察することが出来る。

併しその東宮たりし皇弟が果して何親王なりしかは明かでない。史上亦後龜山天皇の元中年間の東宮に就ては、記載を缺き、今日より之を推定し奉るべき微證とても甚だ乏しいのであるが、今其の零細なる微證によりて、之を考察するに、後村上天皇の諸皇子中この東宮に當て奉るべきは、蓋し泰成親王であらうと思はるゝのである。左にその典據を擧げて之を辯ずる。

新葉和歌集賀部に、

太宰帥親王家にて人々題をさぐりて歌よみ侍りける中に、竹を、右近大將長親この君とわけてそなふく雪ぬま

でおひのほるづき園のくれ竹

といふがある。按ずるにこの太宰帥親王といふのは、新葉和歌集作者に、太宰帥泰成親王とあるにて明かなる如く、後村上天皇の皇子泰成親王にて、この花山院長親の歌は、その詠出の年月不明であるが、その歌意を察するに、皇子方の中にも取りわけこの親王は行末天位にも登り給ふべき御方なれば、一しほ仰ぎ奉るべきであるといふ義と解釋せらるゝから、この親王の遠からず立太子あるべき内その御氣色などのありし頃の作らしく、之を次の歌に對照し、又新葉和歌集の撰進が弘和元年なるより察すれば、天授六、七年天授七年。弘和元年。の歌であらうと思はれる。
新葉和歌集賀部に、

天授七年正月内裏にて春松契久といふことを講ぜられし時序奉りて

春宮大夫師兼

契おくけふをちとせの始にて行す遠しはるの若松

といふがある。天授七年は改元して弘和といふ年で、時の主上は長慶天皇にして、その東宮は皇弟熙成親王であるが、長慶天皇の讓位は弘和三年で、この天授七年はその讓位にも程遠からぬ頃なれば、この頃には既に皇太子熙成親王に讓位の御内意ありしものと考へられる。春松契久といふ題といひ、春宮大夫師兼の序文を作りしことゝいひ、又その歌意といひ、何れも東宮受禪の時も近づきしを以て、東宮の爲め豫め祝賀の意を寓せられた様にも見える。稍想像に亘るかも知れないが、前の長親の歌と對照すると、凡そこの頃長慶天皇讓位の御内意あり、從つて次の天皇の皇太子の御内議などもあつて、泰成親王を以て次代後龜山天皇の皇太子となす事に略々御内定があつた

ものではあるまいか。この兩首の歌は相俟つて泰成親王の東宮に立ち給ふた事を推察し奉るべき微證の一つである。

又泰成親王の太宰帥に任ぜられし事も、親王の立坊に關聯ある一事實として注意すべきことである。弘和元年撰進の新葉和歌集に太宰帥泰成親王とあるを以て、その當時親王が太宰帥の現官を帶び給ふた事は明かであるが、その拜任の時は果して何年であつたらうか。今天授元年五百番歌合を見るに、太宰帥親王の歌があるが、その歌を新葉和歌集に載つてゐる歌と對勘するに、この太宰帥親王といふのは惟成親王の作名であるといふことが知られる。作名といふのは、云はゞかへ名で、同じく五百番歌會に女房とあるは長慶天皇、辨内侍とあるは師成親王の作名である類である。之に依つて考ふれば、當時實際に太宰帥たる親王がありしとすれば、作名として之を用ふるが如きことは無い譯であるから、この天授元年には泰成親王はまだ太宰帥を拜任して居なかつたことを察すべく、泰成親王の太宰帥となられたのは天授元年以後天授七年(弘和元年)に至る數年間にあつたと云へる。泰成親王の立太子の御内議が前に述べる如く天授六、七年の頃であつたとすれば、親王を太宰帥に任ぜられたのは、後醍醐天皇の先づ太宰帥に任ぜられ、次いで立太子ありし先例を追はせ給ふたものとも云ひ得ると思ふ。されば泰成親王の太宰帥拜任は立坊の前提として注意すべき一の微證と云ふべきである。

是に依つて之を見れば、後龜山天皇が皇兄長慶天皇の讓を受けて位に即き給ふや、また皇弟泰成親王を東宮とし給ひ、その立坊のことも天皇即位に先だち既に御内定がありし如く、後村上天皇の三皇子兄弟相繼いで天位を承け給ふ筈であつたことを察し奉るべきである。

果して此の如くでありしとせば、應永元年二月六日足利義滿に御對面なされたことを、「御舍弟於南方爲東宮」と荒曆に

元中東宮考(芝 葛盛)

六二

記したる所にも符合し、皇太子泰成親王が後龜山天皇と共に京都に還幸せられしことをも想像するに難くない。

そこで元中九年に京都還幸の御列次を記した南山御出次第(伏見宮御藏書)を見ると、

先御寶物 駕輿丁
奉昇之

次鎧直垂騎馬十騎 皆懸
總鞍

次腰輿 駕輿丁
奉昇之

次三宮 御鎧
直垂

次福御所宮御方

次供奉人々(以下
略ス)

とあるが、この三宮こそ東宮泰成親王であらうと思はれる。第一の御寶物は云ふまでもなく神器で、第二の腰輿とあるは主上即ち後龜山天皇で、第四の福御所宮とあるは皇弟説成親王であるから、第三の三宮を泰成親王に充て奉るときは、主上次に東宮次に弟宮説成親王の順序となり、御列次より見るも極めて其當を得たものとなる。但しこの三宮を以て或は後龜山天皇の第三皇子ではないかとも一應考へられるが、當時天皇に第三皇子のおはしたる確證がないから、この推定は成立し難い。又古本帝王系圖には親王を以て後村上天皇の第四皇子に掲げてゐるが、恐らくは誤であらう。と云ふのは、南朝御系圖については今日世に行はるゝもの、何れも誤多く直ちに採つて以て憑據とし難いからである。典據とするに足りる本朝皇胤紹運錄には、後村上天皇の系に、寛成親王(長慶天皇)、熙成王(後龜山天皇)の二皇子を掲ぐるのみで、その他の諸皇子並に其の御子孫に就ては、全く記載を缺いてゐる。南朝

の系圖を比較的詳細に記したる書は、何れも近世の著作にかゝり、多くは俗史野乘により、或は著者の臆測を以て作爲したるもので、今日より見れば、殆んどその系圖のみでは信用し難きのみならず、却つて之が爲め南朝の御系を混亂せしめ、世を惑はすものゝ少くないことは、特に注意すべき事に屬する。されば後村上、長慶、後龜山三天皇の皇胤については、其の當時の正確なる史料に溯り、之を考定するにあらざれば、正鵠を得がたい。これ南朝皇胤に關する研究の至難なる所以である。今翻つて後村上天皇の皇子に就て按ずるに、長慶天皇、後龜山天皇御兄弟の外に泰成親王、惟成親王、説成親王、師成親王等の諸皇子のおはしたることは、正確なる徵證が存するけれども、その薨去の年月を知り得るものは、獨り惟成親王のみで、それすら御年齢も不明なれば、御誕生の年次を知り得べくもあらず、その他の三皇子については、御誕生薨去の年月共に明かならず、御長幼の次第を定むるに由なき事故、泰成親王に就ても、前記諸證を綜合して、纔に親王は後村上天皇の第三皇子におはし、後龜山天皇の東宮に立たれたが、元中熈和の成るに及んで、天皇と共に御歸洛あり、天皇の足利義滿に謁を賜ふや、親王また前坊として、同じく御對面になつたと見ることが、御實迹に近いものと推考し奉るのである。

三

元中年間後龜山天皇の東宮は皇弟泰成親王ならんとの考察は以上を以て盡きる。但し大日本史の後龜山天皇紀に「以皇弟太宰帥泰成親王爲皇太弟」といふ記事があるが、大日本史は長慶天皇の讓位、後龜山天皇の受禪を文中二年となすもので、後龜山天皇の受禪を弘和三年と公定せられた。今日の史實とは異つて居るのみならず、この

徳川時代に於ける訴訟上の和解（金田平一郎）

一 苑 史 一

皇弟泰成親王を皇太弟と定めたる典據は、天授二年宗良親王千首和歌の跋文に「内東宮二御方云々」とあるのと、帝王系圖泰成親王の註に東宮とあることとで、天授二年の内、東宮は、研究の進んだ今日より云へば長慶天皇並にその東宮即ち後の後龜山天皇に當るもので、後龜山天皇の東宮とは何等關係のないものである。又大日本史の編者は、前記一條經嗣の荒曆を見て居ないから、後龜山天皇の皇弟が前東宮として足利義滿に謁を賜ふたことに就ては、考慮に加へて居なかつたと云へる。旁々後龜山天皇元中年間の東宮が皇弟泰成親王ならんとの本編の考察は、大日本史の皇太弟泰成親王の説とは全く相觸れてゐないといふ事を附説して置く。